

昭和59年度大学放送教育研究開発番組学習効果に関する研究

—「現代社会の社会学」について—

広島大学放送教育実施委員会専門委員会

(昭和61年1月)

広島大学放送教育実施委員会専門委員会委員

広島大学	学生部長	川 崎	尚（代表者）
〃	総合科学部教授	瀬 川 道 治	
〃	文学部教授	河 野 真	
〃	教育学部教授	今 泉 信 人	
〃	法学部教授	八 木 佐 市	
〃	医学部教授	山 崎 和 男	
〃	工学部教授	佐々木 和 夫	

評価担当者

広島大学	法学部教授	八 木 佐 市
------	-------	---------

は　じ　め　に

この講座は、放送公開講座を大学教育に活用する方途を模索するため、放送教育開発センターの依頼を受けて、放送教育の従来の目的に加えて特別な目的をもって、本大学で実施した放送教育研究開発番組である。

従来から実施している公開講座を基本として、そのビデオを教材として大学の授業にフィードバックして利用し、そこで学生の学習効果等の調査を行い、一般視聴学習者と大学学生の学習意欲及び学習効果等の比較を試みた。

その結果、以下にのべるような知見がえられたのでここに報告する。

この報告書が今後の放送教育のあり方について、特に大学教育との関連において何らかのお役にたてばと願うものである。

目 次

I. 緒 言	1
II. 学習効果調査の方法と対象	3
(1) 調査の経過概要	3
(2) 一般受講者の諸属性・特徴	3
III. 調査結果の考察	8
(1) A 票による得点分布	8
(2) A 票の問題内容別の難易度の推移	9
(3) A 票の正解率と性別	10
(4) A 票の正解率と年齢別	11
(5) A 票の正解率と職業別	12
(6) A 票の正解率と学歴別	13
(7) A 票の正解率と地区別	14
(8) B 票による得点分布・正解率等の概要	14
IV. 学生へのビデオ教材活用による学習効果についての比較考察	18
(1) 研究対象の学校の特質	18
(2) テレビ教材の活用の仕方	18
(3) 学習効果の結果分析	19
(イ) A 票による得点分布	19
(ロ) A 票による各設問別の正解率と各校間の差	19
(ハ) B 票による得点分布	21
(ニ) B 票による各設問別の正解率と比較	22
(ホ) A 票の学習効果の上昇・下降の比較と B 票との対比	23
(4) 包括的な所見	26
○ 附録資料	28

I. 緒 言

本講座は「現代社会の社会学」と題して、主として次の内容を中心に、13回にわたって、1人の講述者によって、テレビ放送された。

- 第 1 回 現代社会と人間生活
ーオリエンテーションを含めての序論ー 1月6日(日)
- 第 2 回 社会学の学問的性格
I 社会学の成立事情 1月13日(日)
- 第 3 回 II 社会学の展開過程 1月20日(日)
- 第 4 回 II 社会学の展開過程 1月27日(日)
- 第 5 回 III 社会学の基本的立場 2月3日(日)
- 第 6 回 家 族
I 社会集団としての特徴 2月10日(日)
II 家族類型
- 第 7 回 III 家族機能 2月17日(日)
IV 現代家族の動向と問題点
- 第 8 回 地域社会 2月24日(日)
I 現代社会における地域社会
II 村落社会の構造と変動
ー日本の村・アメリカの村ー
- 第 9 回 III 都市社会の基本構造 3月3日(日)
IV コミュニティーづくり運動
- 第 10 回 職場社会 3月10日(日)
I 職場社会の基本的性格
II 職場社会の類型
- 第 11 回 III 職場社会のもつ問題点 3月17日(日)
- 第 12 回 現代社会 3月24日(日)
I 現代社会の構造的特徴
II 注目すべき三つの動向
- 第 13 回 III 現代社会の問題点 3月31日(日)
1. 社会の側の問題点
2. 個人の側の問題点

このように第1回から第5回までは主として社会学という学問の性格論をとりあげた。こうした社

社会学的研究立場の基本線にたって、家族、地域社会、職場社会の三つの生活の場をとりあげ、最後に「現代社会」一般についての社会学的な分析と問題点の指摘を行った。この講座の目的は、まず受講者に社会学の学問的性格について、正しい理解をしてもらうことにあった。

従来、社会学は曖昧にして、正体不明の学問であり、科学としての学問的体系をもっていないといった非難、嘲笑や誤解、曲解が多くあったからである。

第2に、日常生活に密着している家族や地域社会や職場社会などを具体的事例としてとりあげ、社会学の視点にたって、分析や実態の確認を行った。このようにして、社会学の調査や分析視点を可能な限り具体的にして、理解を十全的ならしめんとした。

第3に、現代社会一般について、社会学からみた基本的特徴や動向をとらえ、社会と個人の根本問題についても社会学的な立場からの理解をはからんと努力した。

ところで、以上のような本講座の当初のねらいが、受講者の学習効果にどのような結果をもたらしたか、これについて実施した質問紙票による調査結果の資料を、以下、個別的に提示する。

ここでは、一昨年、昨年度の広島大学公開講座の学習効果、検証の際なされた手法に従って分析している。なお、えられた結果の原因、その結果のもつ評価、意味、内容等については、別途分析考察を行うとして、ここでは、主として調査結果のデータを中心とする報告にとどめた。

まず、一般受講者の実態を説明する。

Ⅱ. 学習効果調査の方法と対象

学習効果の認定や分析の仕方には、色々な立場がありうる。しかし、ここでは、従来の例にしたがい、可能な限り単純な形と手法を用いて、それを示すことにした。

(1) 調査の経過概要

まず、第1は、受講者に対して、テレビ公開講座をまだ視聴していない時点において、A票（質問紙票、15問、別掲）による調査を行った。

そして、第2は、受講終了後において、同じA票による第2回目の調査を行って、受講前と後の得点や正解状況の違いを索出せんとした。

さらに、第3には、第2回目は調査時に新たにB票（若干高度の内容の質問紙票）を追加して、B票による調査を行い、受講生が受講後にどのような内容のものに、どの程度の理解を得たかを同様に検証せんとした。

第4に、本年度は、さらに受講生以外の一般の学生についても同様の調査を行い、一般受講者と学生との間にテレビ公開講座を介して、どのような学習効果の違いが認められたかについても、相対的な比較考察をなすように配慮した。

第5に、調査票はA票（15問）B票（15問）の二種類を用いた。（詳細は、巻末の附録を参照のこと）

そして、分析、評価のデーター検証の視点としては、

- ① 各設問別正解、得点の状況
- ② 得点分布状況
- ③ 性、年齢、学歴、地域、職業などの諸属性と正解状況との相関関係
- ④ 受講前と受講後の学習効果の違い
- ⑤ 一般受講生と学生との得点の違いなど

以上のデーター分析結果を通じて、テレビ放送利用による学習効果を具体的に示す。

(2) 一般受講者の諸属性・特徴

昭和59年12月26日の内訳は以下のとおり 171 人となっている。

昭和59年度放送利用による広島大学公開講座の受講生の属性及び地域別一覧

59.12.26現在

項 目		科 目	現代社会の社会学
受 講 者 数			171 人
性 別	男		88
	女		83
年 齢 別	19 歳 以 下		
	20 歳 ～ 29 歳		17
	30 歳 ～ 39 歳		32
	40 歳 ～ 49 歳		49
	50 歳 ～ 59 歳		26
	60 歳 ～ 69 歳		23
	70 歳 以 上		16
	無 記 入		8
職 業 別	公 務 員		32
	会 社 員		23
	教 員		9
	主 婦		42
	学 生		5
	自 営 業		13
	無 職		21
	そ の 他		14
	無 記 入		12
学 歴 別	小 学 校 卒		1
	中 学 校 (旧 高 小) 卒		8
	高 校 (旧 中) 卒		78
	短 大 ・ 高 専 卒		33
	大 学 (旧 専) 卒		35
	大学・短大・高専在学中		8
	そ の 他		4
	無 記 入		4

項 目		科 目	現代社会の社会学
受 講 者 数			171 人
広 島 市			73
大 竹 市			1
尾 道 市			7
呉 市			14
因 島 市			1
竹 原 市			1
東 広 島 市			7
福 山 市			17
三 原 市			5
三 次 市			3
安 芸 郡			9
賀 茂 郡			4
佐 伯 郡			11
高 田 郡			4
豊 田 郡			1
沼 隈 郡			3
比 婆 郡			1
深 安 郡			3
山 県 郡			3
山 口 県			1
愛 媛 県			2

広島地区 139

福山地区 32

しかし、第1回目の受講前の開講式の際に、A票によるテストの受験者は、146人（郵送分も含む）であり、受験率は85.3%である。一昨年の73%、昨年の68%に比べるとかなりの高率となっている。

第1表 第1回目A票による受験者数146人の内訳

分 類		受 験 者 数		分 類		受 験 者 数	
		(実数)	(受験率)			(実数)	(受験率)
A. 性 別	男	72 ^人	81 [%]	D. 学歴別	小 学 校 卒	1 ^人	100 [%]
	女	74	89		中学校(旧高中)卒	7	87
B. 年 齡 別	20 歳 代	15	88		高 校 (旧 中) 卒	67	85
	30 歳 代	26	81		短 大 ・ 高 専 卒	29	87
	40 歳 代	40	81		大 学 (旧 専) 卒	30	85
	50 歳 代	24	92		在 学 中	5	62
	60 歳 代	20	86		そ の 他	3	75
	70 歳 代	15	93	不 記	4	100	
	不 記	6	75	E. 地域別	広島市とその近郊	79	
C. 職 業 別	公 務 員	26	81		そ の 他 の 都 市	46	
	会 社 員	19	82		郡 部	21	
	教 員	7	77				
	主 婦	38	90				
	学 生	3	60				
	自 営 業	12	92				
	無 職	19	90				
そ の 他	12	85					
不 記	10	83					

次に、受講終了後の3月31日に、同一内容の第2回目のA票による調査をしたが、この時の受験者数は、110人であり、第1回目比し、36人減っており、受験率も85.3%から64.3%と落ちている。第2回目のA票の受験者の内訳は第2表のとおりとなっている。

第2表 第2回目A票による受験者数110人の内訳

分 類		受 験 者 数		分 類		受 験 者 数	
		(実数)	(受験率)			(実数)	(受験率)
A. 性 別	男	56 ^人	63 [%]	D. 学歴別	小 学 校 卒	1 ^人	100 [%]
	女	54	65		中学校(旧高中)卒	7	87
B. 年 齡 別	20 歳 代	10	58		高 校 (旧 中) 卒	50	64
	30 歳 代	17	53		短 大 ・ 高 専 卒	19	57
	40 歳 代	29	59		大 学 (旧 専) 卒	20	57
	50 歳 代	22	84		在 学 中	5	62
	60 歳 代	14	60		そ の 他	4	100
	70 歳 代	14	87	不 記	4	100	
	不 記	4	50	E. 地域別	広島市とその近郊	55	
C. 職 業 別	公 務 員	19	59		そ の 他 の 都 市	35	
	会 社 員	14	60		郡 部	20	
	教 員	5	55				
	主 婦	29	69				
	学 生	3	60				
	自 営 業	9	69				
	無 職	14	66				
	そ の 他	11	78				
	不 記	6	50				

次に、第3表では、受験しなかった欠席者の実態を第1回目と第2回目に分けて示す。

第3表 テスト受験しなかった者の割合
－ 欠席の比率 －

分 類			第 1 回 目		第 2 回 目	
			(実数)	(比率)	(実数)	(比率)
計			25 人	14.7 %	61 人	35.7 %
性 別	男		16	19	32	36
	女		9	11	29	35
年 齢 別	20 歳 代		2	12	7	42
	30 歳 代		6	19	15	47
	40 歳 代		9	19	20	41
	50 歳 代		2	8	4	16
	60 歳 代		3	14	9	40
	70 歳 代		1	7	2	13
	不 記		2	25	4	50
職 業 別	公 務 員		6	19	13	41
	会 社 員		4	18	9	40
	教 員		2	23	4	45
	主 婦		4	10	13	31
	学 生		2	40	2	40
	自 営 業		1	8	4	31
	無 職		2	10	7	34
	そ の 他		2	15	3	22
	不 記		2	17	6	50
学 歴 別	小 学 校 卒		0	0	0	0
	中学校（旧高中）卒		1	13	1	13
	高 校（旧中）卒		11	15	28	36
	短 大・高 専 卒		4	13	14	43
	大 学（旧 専）卒		5	15	15	43
	在 学 中		3	37	3	38
	そ の 他		1	25	0	0
	不 記		0	0	0	0

欠席者は、平均で14.7%から35.7%へと増えている。

性別では女子が増えている。年齢別では20歳代が多く増えており、職業別では不記、自営業、無職等が高率を示し、学歴別では小学校卒が不変で0%である。

以上の各表の諸状況を介して、第1回目、第2回目との受験者の動向や特徴をみると、巨視的に次

の諸点が注目される。

- 受験率は、85.3%から64.3%へと下降していること。
- 性別では、女性の受験率が男性に比し、大きく89%から65%にまでダウンしていること。
- 年齢別でも、多少の違いはあるが、何れも第2回目の受験率はダウンしていることがわかる。しかし、70歳代の第1位、50歳代の第2位の高率順位は変っていない。
- 職業別でも同様に、受験率は下降してきているが、その他、主婦においては比較的その下降率が少ない。
- 学歴別では、その他の者が逆に上昇しており、小学校卒、中学校卒、在学中、不記は不変を示し、他はダウンを示している。

これらの受験率の高低の原因は別個の研究課題となるであろう。ともあれ、時の経過と共に、学習の態度が、巨視的には多少だれ気味の傾向を示すと共に、他方では学習への興味、関心を高めて、熱心になる者も出てくるという分化がみられた。

Ⅲ. 調査結果の考察

この調査では、15問からなるA票とB票の2種を用いた。A票は、第1回目(12月23日, 受講前), 第2回目(3月31日, 受講終了後)と、同一内容の15問のものを2回用いた。B票は、受講終了時に別内容の15問を新たに設けて、同時に実施した。

各問1点とし、A票の場合と同じように全正解は15点とした。

次に示すようなテストの諸結果が得られた。

(1) A票による得点分布

得点	第1回目		第2回目	
	人数	%	人数	%
15点	1人	0.7	10人	9.1
14点	7	4.8	32	29.0
13点	33	22.6	23	20.9
12点	20	13.7	18	16.4
11点	29	19.9	11	10.0
10点	27	18.5	8	7.3
9点	11	7.5	6	5.5
8点	10	6.8	1	0.9
7点	2	1.4	0	
6点	5	3.4	0	
5点以下	1	0.7	1	0.9
計	146人	平均 10.95点	110人	平均 12.55点

- 満点15点が、1人から10人に増加している。
次に、14点は、7人から約4.5倍の32人に増加している。
但し、13点の者は逆に減って33人から23人になっている。
- 総括的にいえば得点が上昇し、第2回目の平均点も10.95点から12.55点になっていて、学習効果が受講を通じて出てきていることを示している。

次に設問内容別の難易度の実態について、正解の結果を中心にして説明する。

(2) A票の問題内容別の難易度の推移

設問内容別	第 1 回 目		第 2 回 目	
	正解者数 ^人	正 解 率 [%]	正解者数 ^人	正 解 率 [%]
問 1	106	73	96	87.3
2	63	43	91	82.7
3	99	68	103	93.6
4	125	86	98	89.1
5	116	79	95	86.4
6	91	62	80	72.7
7	102	70	85	77.3
8	142	97	105	95.5
9	133	91	106	96.4
10	75	51	77	70.0
11	67	46	62	56.4
12	139	95	107	97.3
13	99	68	92	83.6
14	135	92	103	93.6
15	107	73	81	73.6
計	146 人 受験率 85.3 %		110 人 受験率 64.3 %	

- 第1回目、第2回目共に、問題別の難易度が、正解率からよみとられる。即ち、正解率97%、95%に達している易しい問8、問12などの問題もあれば、43%、46%という正解率の低い問2、問11などのように比較的難問もあるといったバラツキの結果を示している。

- また、第1回目と第2回目を比較すると予想どおり、問8の例外を除き、他は何れも全部2回目の方が正解率が高くなっている。

こうした正解率の推移は受講を通じて、ある程度学習能力が身につく、高まったことを示している。

- 正解率の特に高まった設問には、問2、問3、問10などがあり、逆に下がったものには問8がある。

また、ほとんど前後で変らぬものには、問15、問14、問12などがあり、注目されよう。

なお、15問の設問内容別を大まかにいえば、以下のA、B、C、D、Eの5内容に大別できる。

- A. 問1、問2、問3は社会学の基礎理論に関する内容のもの
- B. 問4、問5、問6、問7は家族に関する内容のもの
- C. 問8、問9、問10は地域社会に関する内容のもの
- D. 問11、問12は職場社会に関する内容のもの

E. 問13, 問14, 問15は現代社会に関する内容のもの

(3) A票の正解率と性別

設問内容別	第 1 回 目				第 2 回 目			
	男		女		男		女	
	実 数	正解率	実 数	正解率	実 数	正解率	実 数	正解率
問 1	50人	69.4%	56人	75.7%	48人	85.7%	48人	88.9%
2	32	44.4	31	41.9	42	75.0	49	90.7
3	51	70.8	48	64.9	53	94.6	50	92.6
4	61	84.7	64	86.5	51	91.1	47	87.0
5	61	84.7	55	74.3	48	85.7	47	87.0
6	42	58.3	49	66.2	42	75.0	38	70.4
7	53	73.6	49	66.2	40	71.4	45	83.3
8	71	98.6	71	95.7	54	96.4	51	94.4
9	66	91.7	67	90.5	54	96.4	52	96.3
10	40	55.6	35	47.3	37	66.1	40	74.1
11	34	47.2	33	44.6	31	55.4	31	57.4
12	66	91.7	73	98.6	55	98.2	52	96.3
13	47	65.3	52	70.3	50	89.3	42	77.8
14	64	88.9	71	95.9	53	94.6	50	92.6
15	49	68.1	58	78.4	40	71.4	41	75.9
計	72 人		74 人		56 人		54 人	

- 男女ともに正解率の高い設問は、第1回目、男性では問8, 問9, 問12, 問14の順位を示し、女性では問12, 問8, 問14, 問9の順位と若干比率を異にしているが、ベスト4としては不変である。
- 次に前後関係でみると、第2回目の方が当然のことかもしれないが男女ともに等しく正解率が高まっている。

男性の平均正解率は72.9%から83.1%へ、女性は73.1%から84.3%へと、男女差も第1回目のテストに比べ、第2回目では正解率の点で平均値としては上昇し、性差も縮少してきているのである。

(4) A票の正解率と年齢別

設問別 年齢別	第 1 回 目 146 人							第 2 回 目 110 人						
	20代	30代	40代	50代	60代	70代	不記	20代	30代	40代	50代	60代	70代	不記
問 1	12	22	30	19	12	6	5	9	15	29	18	11	11	3
	80.0	84.6	75.0	79.2	60.0	40.0	83.3	90.0	88.2	100.0	81.8	78.6	78.6	75.0
2	8	10	17	9	12	5	2	8	17	24	17	13	8	4
	53.3	38.5	42.5	37.5	60.0	33.3	33.3	80.0	100.0	82.8	77.3	92.9	57.1	100.0
3	11	19	26	16	12	12	3	10	17	29	17	13	13	4
	73.3	73.1	65.0	66.7	60.0	80.0	50.0	100.0	100.0	100.0	77.3	92.9	92.9	100.0
4	14	21	35	20	18	11	6	10	15	26	20	13	11	3
	93.3	80.8	87.5	83.3	90.0	73.3	100.0	100.0	88.2	89.7	90.9	92.9	78.6	75.0
5	13	18	33	18	18	12	4	8	14	28	16	13	12	4
	86.7	69.2	82.5	75.0	90.0	80.0	66.7	80.0	82.4	96.6	72.7	92.9	85.7	100.0
6	11	17	23	14	12	11	3	7	14	22	16	7	12	2
	73.3	65.4	57.5	58.3	60.0	73.3	50.0	70.0	82.4	75.9	72.7	50.0	85.7	50.0
7	12	22	23	16	15	9	5	9	16	21	17	11	8	3
	80.0	84.6	57.5	66.7	75.0	60.0	83.3	90.0	94.1	72.4	77.3	78.6	57.1	75.0
8	15	26	38	24	19	15	5	10	16	29	21	13	13	3
	100.0	100.0	95.0	100.0	95.0	100.0	83.3	100.0	94.1	100.0	95.5	92.9	92.9	75.0
9	14	25	36	23	18	13	4	10	16	29	20	13	14	4
	93.3	96.1	90.0	95.8	90.0	86.7	66.7	100.0	94.1	100.0	90.9	92.9	100.0	100.0
10	5	14	22	13	8	11	1	8	15	20	13	9	9	3
	33.3	53.8	55.0	54.2	40.0	73.3	16.7	80.0	88.2	69.0	59.1	64.3	64.3	75.0
11	7	10	21	12	10	4	3	5	12	18	13	7	5	2
	46.7	38.5	52.5	50.0	50.0	26.7	50.0	50.0	70.6	62.1	59.1	50.0	35.7	50.0
12	15	26	39	22	18	14	5	10	17	28	21	13	14	4
	100.0	100.0	97.5	91.7	90.0	93.3	83.3	100.0	100.0	96.6	95.5	92.9	100.0	100.0
13	12	18	23	18	14	9	5	10	11	23	20	14	11	3
	80.0	69.2	57.5	75.0	70.0	60.0	83.3	100.0	64.7	79.3	90.9	100.0	78.6	75.0
14	15	25	36	23	18	12	6	10	15	27	21	14	13	3
	100.0	96.1	90.0	95.8	90.0	80.0	100.0	100.0	88.2	93.1	95.5	100.0	92.9	75.0
15	12	17	32	20	16	6	4	10	14	21	17	9	8	2
	80.0	65.4	80.0	83.3	80.0	40.0	66.7	100.0	82.4	72.4	77.3	64.3	57.1	50.0
実数	15人	26人	40人	24人	20人	15人	6人	10人	17人	29人	22人	14人	14人	4人

※各問、上段は正解者数（人）、下段は正解率（％）

- 各年代ともに、第1回目に比し、第2回目は各設問とも正解率が高まったことを示している。
- 年齢別では、30代、40代の正解率の上昇率が顕著である。
上昇比率13.5%、13.7%である。
- これに比して、50代、60代の高齢者層はその上昇率が低いようである。
上昇比率6.7%、9.1%である。

(5) A票の正解率と職業別

職業別		設問別	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	計
第1回目	公務員		22 84.6	9 34.6	17 65.4	22 84.6	21 80.8	19 73.1	18 69.2	26 100.0	23 88.5	13 50.0	15 57.7	26 100.0	20 76.9	23 88.5	20 76.9	26人
	会社員		15 78.9	11 57.9	14 73.7	17 89.5	18 94.7	8 42.1	14 73.3	18 94.7	18 94.7	9 47.4	9 47.4	18 94.7	15 78.9	19 100.0	13 68.4	19人
	教員		6 85.7	0 0	4 57.1	5 71.4	6 85.7	5 71.4	7 100.0	7 100.0	7 100.0	4 57.1	3 42.9	6 85.7	3 42.9	6 85.7	5 71.4	7人
	主婦		29 76.3	16 42.1	31 81.6	34 89.5	28 73.7	25 65.8	25 65.8	37 97.4	37 97.4	21 55.3	17 44.7	37 97.4	27 71.7	37 97.4	31 81.6	38人
	学生		2 66.7	2 66.7	2 66.7	3 100.0	2 66.7	3 100.0	3 100.0	3 100.0	3 100.0	1 33.3	1 33.3	3 100.0	2 66.7	3 100.0	2 66.7	3人
	自営業		5 41.7	8 66.7	8 66.7	9 75.0	11 91.7	6 50.0	7 58.3	11 91.7	10 83.3	6 50.0	5 41.7	12 100.0	6 50.0	11 91.7	8 66.7	12人
	無職		13 68.4	9 47.4	13 68.4	17 89.5	16 84.2	13 68.4	14 73.7	19 100.0	17 89.5	11 57.9	8 42.1	16 84.2	13 68.4	14 73.7	12 63.2	19人
	その他		6 50.0	5 41.4	6 50.0	10 83.3	6 50.0	5 41.7	7 58.3	11 91.7	11 91.7	6 50.0	6 50.0	12 100.0	7 58.3	12 100.0	9 75.0	12人
	不記		8 80.0	3 30.0	4 40.0	8 80.0	8 80.0	7 70.0	7 70.0	10 100.0	7 70.0	4 40.0	3 30.0	9 90.0	6 60.0	10 100.0	7 70.0	10人
	計		106 72.6	63 43.1	99 67.8	125 85.6	116 79.5	91 62.3	102 69.9	142 97.2	133 91.1	75 51.4	67 45.9	139 95.2	99 67.8	135 92.5	107 73.3	146人
第2回目	公務員		19 100.0	18 94.7	18 94.7	16 84.2	16 84.2	15 78.9	15 78.9	18 94.7	17 89.5	14 73.7	13 68.4	19 100.0	17 89.5	16 84.2	17 89.5	19人
	会社員		13 92.9	11 78.6	12 85.7	11 78.6	12 85.7	11 78.6	11 78.6	14 100.0	14 100.0	13 92.9	8 57.1	14 100.0	13 92.9	14 100.0	12 85.7	14人
	教員		5 100.0	3 60.0	5 100.0	5 100.0	5 100.0	4 80.0	4 80.0	5 100.0	5 100.0	3 60.0	4 80.0	5 100.0	4 80.0	5 100.0	4 80.0	5人
	主婦		25 86.2	27 93.1	29 100.0	27 93.1	26 89.7	24 82.8	26 89.7	28 96.6	29 100.0	22 75.9	19 65.5	28 96.6	22 75.9	27 93.1	21 72.4	29人
	学生		2 66.7	2 66.7	3 100.0	3 100.0	3 100.0	2 66.7	2 66.7	3 100.0	3 100.0	2 66.7	3 100.0	3 100.0	3 100.0	3 100.0	3 100.0	3人
	自営業		7 77.8	5 55.6	8 88.9	7 77.8	9 100.0	6 66.7	5 55.6	9 100.0	9 100.0	8 88.9	5 55.6	8 88.9	7 77.8	8 88.9	5 55.6	9人
	無職		11 78.6	10 71.4	12 85.7	12 85.7	13 92.9	9 64.3	10 71.4	12 85.7	13 92.9	6 42.9	6 42.9	13 92.9	13 92.9	13 92.9	8 57.1	14人
	その他		11 100.0	11 100.0	10 90.9	11 100.0	5 45.5	6 54.5	9 81.8	10 90.9	10 90.9	5 45.5	3 27.3	11 100.0	9 81.8	11 100.0	7 63.6	11人
	不記		3 50.0	4 66.7	6 100.0	6 100.0	6 100.0	3 50.0	3 50.0	6 100.0	6 100.0	4 66.7	1 16.7	6 100.0	4 66.7	6 100.0	4 66.7	6人
	計		96 87.3	91 82.7	103 93.6	98 89.1	95 86.4	80 72.7	85 77.3	105 95.5	106 96.4	77 70.0	62 56.4	107 97.3	92 83.6	103 93.6	81 73.6	110人

※ 各欄、上段は正解者数(人)、下段は正解率(%)

- 第1回目において100%の正解率を示めず職業は、学生(7問)、教員(3問)、公務員、無職、その他、不記(2問)となっていて、学生、教員の正解率が比較的高い。
- 第2回目では、すべて正解率が高まっているが、職業別では学生(10問)、教員(8問)、不記(7問)、その他(5問)の順となっており、学生、教員の正解率の高いことが特に目立っている。教員の上昇比率は17.5%で最高である。つづいて、公務員が11.6%である。無職や不記の者は職業別では上昇比率が比較的低いようである。

(6) A票の正解率と学歴別

学歴別	設問別	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	計
第1回	小学校卒	0 0	0 0	1 100.0	0 0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1人
	中学校卒 (旧高小)	4 57.1	4 57.1	4 57.1	6 85.7	4 57.1	4 57.1	4 57.1	7 100.0	5 71.4	2 28.6	1 14.3	6 85.7	5 74.1	6 85.7	4 57.1	7人
	高校卒 (旧中)	52 77.6	27 40.3	47 70.1	55 82.1	52 77.6	43 64.2	42 62.7	66 98.5	62 92.5	37 55.2	28 41.8	66 98.5	47 70.1	60 89.6	50 74.6	67人
	短大・ 高専卒	21 72.4	10 34.5	20 69.0	26 89.7	24 82.8	19 65.5	19 65.5	27 93.1	25 86.2	16 55.2	12 41.4	28 96.6	18 62.1	27 93.1	21 72.4	29人
	大学卒 (旧専)	22 77.3	18 60.0	21 70.0	29 96.7	28 93.3	16 53.3	26 86.7	30 100.0	30 100.0	14 46.7	21 70.0	27 90.0	20 66.7	29 96.7	24 80.0	30人
	在学中	2 40.0	3 60.0	3 60.0	5 100.0	4 80.0	5 100.0	5 100.0	5 100.0	5 100.0	2 40.0	1 20.0	5 100.0	4 80.0	5 100.0	4 80.0	5人
	その他	1 33.3	1 33.3	1 33.3	1 33.3	1 33.3	1 33.3	2 66.7	3 100.0	2 66.7	2 66.7	2 66.7	3 100.0	1 33.3	3 100.0	2 66.7	3人
	不記	4 100.0	0 0	2 50.0	3 75.0	2 50.0	2 50.0	3 75.0	3 75.0	1 25.0	1 25.0	1 25.0	3 75.0	3 75.0	4 100.0	1 25.0	4人
	計	106 72.6	63 43.1	99 67.8	125 85.6	116 79.5	91 62.3	102 69.9	142 97.2	133 91.1	75 51.4	67 45.9	139 95.2	99 67.8	135 92.5	107 73.3	146人
	第2回	小学校卒	1 100.0	1 100.0	1 100.0	0 0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1 100.0	1人
	中学校卒 (旧高小)	5 71.4	7 100.0	5 71.4	6 85.7	6 85.7	5 71.4	4 57.1	6 85.7	6 85.7	5 71.4	2 28.6	6 85.7	5 71.4	7 100.0	2 28.6	7人
	高校卒 (旧中)	44 88.0	42 84.0	46 92.0	41 82.0	44 88.0	35 70.0	38 76.0	47 94.0	48 96.0	36 72.0	27 54.0	48 96.0	44 88.0	45 90.0	37 74.0	50人
	短大・ 高専卒	17 89.5	15 78.9	19 100.0	19 100.0	17 89.5	17 89.5	14 73.7	19 100.0	19 100.0	15 78.9	11 57.9	19 100.0	15 78.9	17 89.5	14 73.7	19人
	大学卒 (旧専)	18 90.0	14 70.0	19 95.0	18 90.0	17 85.0	13 65.0	17 85.0	20 100.0	19 95.0	13 65.0	15 75.0	20 100.0	18 90.0	20 100.0	19 95.0	20人
	在学中	4 80.0	4 80.0	5 100.0	5 100.0	4 80.0	3 60.0	4 80.0	5 100.0	5 100.0	3 60.0	3 60.0	5 100.0	4 80.0	5 100.0	4 80.0	5人
	その他	4 100.0	4 100.0	4 100.0	4 100.0	3 75.0	4 100.0	4 100.0	4 100.0	4 100.0	3 75.0	2 50.0	4 100.0	2 50.0	4 100.0	2 50.0	4人
	不記	3 75.0	4 100.0	4 100.0	4 100.0	4 100.0	2 50.0	3 75.0	3 75.0	4 100.0	1 25.0	1 25.0	4 100.0	3 75.0	4 100.0	2 50.0	4人
	計	96 87.3	91 82.7	103 93.6	98 89.1	95 86.4	80 72.7	85 77.3	105 95.5	106 96.4	77 70.0	62 56.4	107 97.3	92 83.6	103 93.6	81 73.6	110人

※ 各欄、上段は正解者数(人)、下段は正解率(%)

- 正解率の高いのは「小学校卒」「大学卒」「在学中」となっているが、実数が少ないので、一概に断定はできない。しかし、第2回目の場合においても、「小学校卒」「短大卒」「大学卒」「その他」の正解率はずばぬけて高いので、熱心な学習者であることを裏付けている。
- 巨視的にみて、正解率と学歴別との間には有意差は認められないようである。
第1回目では、正解率の平均が学歴別では「小学校卒」80.0%、「大学卒」78.9%、「在学中」77.3%などを示しているのに対し、「不記」55.0%、「その他」57.8%、「中学校卒」63.0%と比較的低い。この点で第2回目の正解率は何れも高まってきているのがよみとられる。そして学歴差も正解率の上では縮小化を示している。
- 第1回目と第2回目のテストの結果の正解率の上昇率をみると、「小学校卒」は13.3%、「中学校卒」は10.3%、「高校卒」は9.9%、「短大卒」は14.7%、「大学卒」は7.8%、「在学中」は6.7%、「その他」は28.9%、「不記」は21.7%の内訳であり、「その他」「不記」「短大卒」の者の上昇率が高い。

(7) A票の正解率と地区別

地区別	設問別	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	計
第1回目	広島市とその近郊	59 74.7	35 44.3	52 65.8	68 86.1	65 82.3	44 55.7	54 68.4	77 97.5	71 89.9	42 53.2	39 49.4	75 94.9	55 69.6	75 94.9	62 78.5	79 73.7
	その他の都市	31 67.4	18 39.1	31 67.4	39 84.8	35 76.1	31 67.4	34 73.9	44 95.7	42 91.3	23 50.0	21 45.7	44 95.7	30 65.2	41 89.1	30 65.2	46 71.6
	郡部	16 76.2	10 47.6	16 76.2	18 85.7	16 76.2	16 76.2	14 66.7	21 100.0	20 95.2	10 47.6	7 33.3	20 95.2	14 66.7	19 90.5	15 71.4	21 73.6
	計	106 72.6	63 43.1	99 67.8	125 85.6	116 79.5	91 62.3	102 69.9	142 97.2	133 91.1	75 51.4	67 45.9	139 95.2	99 67.8	135 92.5	107 73.3	146 73.0
第2回目	広島市とその近郊	50 90.9	49 89.1	53 96.4	49 89.1	50 90.9	37 67.3	43 78.2	52 94.5	55 100.0	43 78.2	32 58.2	55 100.0	42 76.4	50 90.9	42 76.4	55 85.1
	その他の都市	28 80.0	25 71.4	32 91.2	33 94.2	30 85.7	26 74.3	26 74.3	32 97.1	32 91.2	23 65.7	19 54.3	32 91.2	32 91.2	33 94.3	27 77.1	35 82.2
	郡部	18 90.0	17 85.0	18 90.0	16 80.0	15 75.0	17 85.0	16 80.0	19 95.0	19 95.0	11 55.0	11 55.0	20 100.0	18 90.0	20 100.0	12 60.0	20 82.3
	計	96 87.3	91 82.7	103 93.6	98 89.1	95 86.4	80 72.7	85 77.3	105 95.5	106 96.4	77 70.0	62 56.4	107 97.3	92 83.6	103 93.6	81 73.6	110 83.7

※ 各欄、上段は正解者数(人)、下段は正解率(%)

- テスト受験者の動向をみると、「広島市とその近郊」は第1回目79人から第2回目は55人に来て減り、ついで、「その他の都市」が46人から35人へ、「郡部」は21人から20人へと僅か1名減である。

郡部の人々は都市部の人々に比し、受験や受講が熱心であるという地域性がみられる。

- 正解率における向上性も都市部に比べ相対的に郡部の方が高い。

なお、設問内容別と地区別との相関関係はあまり認められない。

(8) B票による得点分布・正解率等の概要

受講後の第2回目の調査において、A票と同時に、新たな専門的内容の設問を新設し、B票として作成し、テストを行った。

これも、A票と同じ様式で15問構成である。正解率100%は15点満点として示す方法をとっている。

B票による得点分布

	実数	%
15点	8人	7.3
14点	13	11.8
13点	12	10.9
12点	17	15.5
11点	19	17.3
10点	13	11.8
9点	13	11.8
8点	7	6.4
7点	3	2.7
6点	3	2.7
5点	2	1.8
計 110 人		平均 11.1 点

○ A票の平均得点数が12.6点であるのに対し、B票の平均得点数は11.1点である。若干、専門的内容のため難しく、点がとりにくかったことを示している。

○ A票の第1回目のテストでは平均点が10.9点であったが、第2回目では12.6点に向上している。A票では15点満点の者10人であったが、B票ではそれが8人となっているにすぎない。

なお、B票による設問内容別の正解率による難易度や正解率平均等について、対象者の諸属性との関連を示すと次のようである。

(イ) 性別と正解率の平均

男	56 人	69.4 %
女	54 人	77.0 %

○ 女子の方が約8%高い。

(ロ) 年齢別と正解率の平均

20 代	10 人	80.7 %
30 代	17 人	80.4 %
40 代	29 人	74.3 %
50 代	22 人	75.1 %
60 代	14 人	70.9 %
70 代	14 人	63.3 %
不 記	4 人	73.3 %
計	110 人	74.0 %

○ 20代、30代の年齢層が高率を示し、70代は低い正解率の平均となっている。

(ハ) 職業別と正解率の平均

公 務 員	19 人	74.0 %
会 社 員	14 人	69.7 %
教 員	5 人	76.0 %
主 婦	29 人	81.6 %
学 生	3 人	82.2 %
自 営 業	9 人	69.6 %
無 職	14 人	72.9 %
そ の 他	11 人	65.4 %
不 記	6 人	58.9 %
計	110 人	74.0 %

○ 学生、主婦、教員などが高率であり、不記、その他が概して低率であることを示している。

(ニ) 学歴別と正解率の平均

小学校卒	1 人	100.0 %
中学校卒	7 人	73.0 %

高 校 卒	50 人	73.3 %
短 大 卒	19 人	76.1 %
大 学 卒	20 人	76.7 %
在 学 中	5 人	76.0 %
そ の 他	4 人	70.0 %
不 記	4 人	66.7 %
計	110 人	74.0 %

- 小学校卒，大学卒，短大卒，在学中などが76%以上の平均で高率を示し，逆に，不記，その他は比較的に低率を示している。

(ホ) 地区別と正解率の平均

広島市とその近郊	55 人	75.3 %
そ の 他 の 都 市	35 人	72.2 %
郡 部	20 人	73.7 %

- 地域差はあまりないが，広島市が第1位，ついで郡部が第2位，その他の都市が第3位となっている。

以上，正解率の平均値でみる限り，性，年齢，職業，学歴，地域別などの諸属性において多少のへだたりがみられる。

最後に，B票の設問内容別の正解率の平均値は次のようになる。

(ヘ) B票の設問内容別の平均正解率
— 問題の難易度の実態 —

問	正解者数	正 解 率
1	68 人	61.8 %
2	78	70.9
3	54	49.1
4	78	70.9
5	70	63.6
6	92	83.6
7	94	85.5
8	89	80.9
9	67	60.9
10	102	92.7
11	80	72.7
12	69	62.7
13	106	96.4
14	102	92.7
15	74	67.3
	計 110 人	平均 74.0 %

- 各問題の難易度を各個にみても、正解率の高い易問としては、問10、問13、問14などがあり、逆に正解率の低い難問とみられるものとしては、問1、問3、問9、問12などがあげられる。

B票は専門的内容の加味した内容のものであるだけに、A票に比べてみる時、正解率も得点分布もともに低率となっている。

Ⅳ. 学生へのビデオ教材活用による学習効果 についての比較考察

一般視聴学習者（以下、一般受講者）と学生達の学習意欲や学習態度及び学習効果を比較してみようとする研究上の仮説に基いて、学習効果の到達度を、正解率、得点分布、授業中のビデオ教材を聴視する学生達の反応や態度等を通じて、総合的に幅広く観察、検証した諸事実について、以下個別的報告をする。

（１）研究対象の学校の特質

ここでは、研究対象の実験的対象校として、次のＡ，Ｂ，Ｃの３校を取り上げた。これらの３校は、何れも担当者が、非常勤講師として社会学概論を講じている大学・学校である。

Ａ＝看護専門学校２年生 38人

Ｂ＝女子短期大学、家政科１年生 50人

Ｃ＝男子工業科の短期大学１年生 43人

何れも、30時間（2単位認定）の社会学概論の講義を、4月から9月末（前期）の期間にかけて行い、一般受講者の場合に行ったのと同様のＡ票，Ｂ票を用いて、共通の規格基準で、Ａ票は第1回目（受講前），第2回目（受講終了後）の2回で実施し，Ｂ票も同様に第2回目の時に1回実施した。

（２）テレビ教材の活用の仕方

テレビのビデオ活用は、まず一般講義の後に使用する場合と、逆に、講義する前に予備知識の目的で使用する場合もあった。13回分のすべてのビデオを全部、全時間に使用はしなかった。あくまで講義の補足のために、部分選択的に用いた。ビデオ使用時間の割合は、大体、講義7，ビデオ教材活用3の割合であった。45分のビデオを部分的に用いた。これを、繰り返して見せたりしたが、1本の全部を始めから終りまで45分間見せるという方法はとらなかった。

講義とビデオ教材との7対3のミックスの授業形態という実態とみてよい。

(3) 学習効果の結果分析

(イ) A票による得点分布

学校別 得点別	看護学校		女子短大		工業短大		一般受講者	
	第1回目 実数 %	第2回目 実数 %	第1回目 実数 %	第2回目 実数 %	第1回目 実数 %	第2回目 実数 %	第1回目 実数 %	第2回目 実数 %
15点	人	8人 21.6	人	1人 2.1	1人 2.3	人	1人 0.7	10人 9.1
14点	4 10.5	13 35.1		3 6.4		1 2.4	7 4.8	32 29.0
13点	6 15.8	10 27.0	2 4.0	2 4.3	1 2.3	3 7.1	33 22.6	23 28.9
12点	11 28.9	5 13.5	7 14.0	6 12.8	7 16.3	5 12.0	20 13.7	18 16.4
11点	10 26.3	1 2.7	7 14.0	7 14.9	5 11.6	9 21.4	29 19.9	11 10.0
10点	5 13.2		8 16.0	7 14.9	9 20.9	4 9.5	27 18.5	8 7.3
9点	2 5.3		5 10.0	11 23.4	7 16.3	10 23.8	11 7.5	6 5.5
8点			8 15.0	6 12.8	7 16.3	3 7.1	10 6.8	1 0.9
7点			6 12.0	1 2.1	4 9.3	4 9.5	2 1.4	
6点			5 10.0	2 4.3	2 4.7	3 7.1	5 3.4	
5点			2 4.0				1 0.7	1 0.9
4点								
3点				1 2.1				
2点								
1点								
計・ 平均点	38人 11.7点	37人 13.6点	50人 9.2点	47人 10.0点	43人 9.7点	42人 9.8点	146人 11.0点	110人 12.6点

学校差が明白に認められる。第1回目に比し第2回目は何れも得点数が上昇しているものの、そのバラツキに各学校間の差がでている。得点の各単位別の順位をいえば、第1位「看護学校」、第2位「一般受講者」、第3位「女子短大」、第4位「工業短大」という結果を示している。

次に問題別の難易度について、正解率の高低を手掛りとしながら、各校間や一般受講者との違いをみてみよう。

(ロ) A票による各設問別の正解率と各校間の差

学校別 問題別	看護学校		女子短大		工業短大		一般受講者	
	第1回目 実数 %	第2回目 実数 %	第1回目 実数 %	第2回目 実数 %	第1回目 実数 %	第2回目 実数 %	第1回目 実数 %	第2回目 実数 %
問 1	25人 65.8	33人 89.2	31人 62.0	44人 93.6	30人 69.8	36人 85.7	106人 72.6	96人 87.3
2	26 68.4	29 78.4	20 40.0	27 57.4	19 44.2	21 50.0	63 43.1	91 82.7
3	26 68.4	37 100.0	32 64.0	32 68.1	31 72.1	28 66.7	99 67.8	103 93.6
4	36 94.7	36 97.3	36 72.0	34 72.3	38 88.4	30 71.4	125 85.6	98 89.1

学校別 問題別	看護学校		女子短大		工業短大		一般受講者	
	第1回目 実数 %	第2回目 実数 %	第1回目 実数 %	第2回目 実数 %	第1回目 実数 %	第2回目 実数 %	第1回目 実数 %	第2回目 実数 %
問 5	31人 81.6	33人 89.2	40人 80.0	34人 72.3	36人 83.7	31人 73.8	116人 79.5	95人 86.4
6	15 39.5	32 86.5	23 46.0	23 48.9	21 48.8	19 45.2	91 62.3	80 72.7
7	34 89.5	33 89.2	37 74.0	35 74.5	28 65.1	26 61.9	102 69.9	85 77.3
8	37 97.4	37 100.0	42 84.0	43 91.5	37 86.0	31 73.8	142 97.2	105 95.5
9	37 97.4	37 100.0	29 58.0	35 74.5	30 69.8	35 83.3	133 91.1	106 96.4
10	27 71.1	34 91.9	32 64.0	29 61.7	21 48.8	29 69.0	75 51.4	77 70.0
11	26 68.4	29 78.4	16 32.0	17 36.2	14 32.6	13 31.0	67 45.9	62 56.4
12	38 100.0	37 100.0	44 88.0	40 85.1	41 95.3	34 81.0	139 95.2	107 97.3
13	38 100.0	36 97.3	27 54.0	25 53.2	22 51.2	22 52.4	99 67.8	92 83.6
14	36 94.7	35 94.6	31 62.0	29 61.7	32 74.4	29 69.0	135 92.5	103 93.6
15	21 55.3	25 67.6	19 38.0	24 51.1	16 37.2	19 45.2	107 73.3	81 73.6
計	38人 79.5%平均	37人 90.6%平均	50人 61.2%平均	47人 66.8%平均	43人 64.5%平均	42人 64.0%平均	146人 73.0%平均	110人 83.7%平均

- 各学校間に、或は一般受講者の中にも共通して、問題別の難易度が正解率のパラツキとして認められる。
- また、各学校・一般受講者ともに第1回目に比し第2回目の正解率が高まっている傾向を示しているが、「一般受講者」では「問8」が逆に1.7%下降しており、「看護学校」では、「問13」が0.7%、「問7」が0.3%、「問14」が0.1%、「女子短大」では、「問5」が7.7%、「問12」が2.9%、「問10」が2.3%、「問13」が0.8%、「問14」が0.3%と下降している。「工業短大」は、第1回目の正解率平均が64.5%から第2回目は64.0%へと0.5%下降しているのである。問題数では「問3」「問4」「問5」「問6」「問7」「問8」「問11」「問12」「問14」と過半数以上になっており、全然、学習効果のあがっておらない状況を示している。
- 第1回目の各問題別の正解率では、15問中11問題を「看護学校」が第1位を占めている。これに対し、「女子短大」は正解率第1位を占めている問題は一つもない。また、「工業短大」では第1位の正解率を示している問題としては、僅か、「問1」「問3」「問5」「問6」の4問があるのみである。このように学校差が著しい。
- 第2回目の同様の結果をみると、正解率で第1位を占めている問題数をみると、「看護学校」では15問中、「問2」「問3」「問4」「問5」「問6」「問7」「問8」「問9」「問10」「問11」「問12」「問13」「問14」「問15」の14問に及んでおり、「問1」だけ一つ、「女子短大」がトップを占めているにすぎない。

「工業短大」ではトップの正解率をもつ問題は一つもない。

ちなみに、一般受講者との比較で、正解率上の第1位をみると、「一般受講者」は15問中「問2」「問15」の2問題だけであり、正解率の第1位は「看護学校」である。

ついで、「一般受講者」「女子短大」「工業短大」の順位となる。

次はB票による結果を同様な方法で分析して示すことにする。

B票は、1回だけ、受講終了後に行ったもので、多少、専門的内容を設問している。

(イ) B票による得点分布

学校別 得点別	看護学校		女子短大		工業短大		一般受講者	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
15点	人		人		人		8人	7.3
14点							13	11.8
13点	7	18.9					12	10.9
12点	8	21.6	3	6.4			17	15.5
11点	10	27.0	4	8.5	4	9.5	19	17.3
10点	7	18.9	6	12.8	2	4.7	13	11.8
9点	4	10.8	5	10.6	7	16.7	13	11.8
8点	1	2.7	10	21.3	5	11.9	7	6.4
7点			10	21.3	5	11.9	3	2.7
6点			3	6.4	9	21.4	3	2.7
5点			4	8.5	6	14.3	2	1.8
4点			2	4.3	2	4.8		
3点					2	4.8		
2点								
1点								
計	37人	11.1点平均	47人	8.1点平均	42人	7.1点平均	110人	11.1点平均

B票の得点分布は別掲の表のとおり、学校別では「看護学校」が上位の「13点から8点」の層、「女子短大」は「12点から4点」の層、「工業短大」は「11点から3点」の層に分布し、学校差が歴然と示されている。

また、学校群と一般受講者とを比較すれば、満点の15点、それにつぐ14点の者が、学校群では皆無なのに対し、一般受講者では8人、13人であり、約19%もいる。

そして、得点分布も「15点から5点」の層にまで及んでいる。

これは、110人と人数も多く、さまざまな受講者で構成されているという母集団の違いにも一因がある。

次に、同じく B 票の設問内容別の正解率を通じて、問題別の難易度が、各学校間に、そして、また学校群と一般受講者との間に、どのような数字で示されているかについてみてみよう。

(二) B 票による各設問別の正解率の比較
— 問題の難易度の比較実態 —

学校別 問題別	看護学校		女子短大		工業短大		一般受講者	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
問 1	16人	43.2	22人	46.8	23人	54.8	68人	61.8
2	23	62.2	20	42.6	21	50.0	78	70.9
3	10	27.0	7	14.9	9	21.4	54	49.1
4	18	48.6	23	48.9	20	47.6	78	70.9
5	29	78.4	23	48.9	13	31.0	70	63.6
6	31	83.8	13	27.7	15	35.7	92	83.6
7	35	94.6	32	68.1	24	57.1	94	85.5
8	35	94.6	40	85.1	24	57.1	89	80.9
9	27	73.0	30	63.8	17	40.5	67	60.9
10	33	89.2	35	74.5	17	40.5	102	92.7
11	31	83.8	26	55.3	20	47.6	80	72.7
12	23	62.2	18	38.3	13	21.0	69	62.7
13	37	100.0	38	80.9	33	78.6	106	96.4
14	32	86.5	38	80.9	30	71.4	102	92.7
15	31	83.8	16	34.0	21	50.0	74	67.3
計	37人	74.1%平均	47人	54.0%平均	42人	47.0%平均	110人	74.1%平均

上表によれば、正解率の高い易問もあれば、正解率の低い難問もあったことが示されている。「看護学校」での比較的難問とみられるものは、「問1」「問3」「問4」などであるが、「女子短大」では同じく、「問3」「問6」「問15」などが目立っている。「工業短大」では、「問3」「問5」「問12」などが難問となっている。「一般受講者」では、難易度のバラツキは比較的少ないが、「問1」「問3」や「問9」などは正解率が低く、やはり難問とみられている。ともあれ、学校の特質によって、難易の度合いが違っていることが、明らかにみとれる。

最後に A 票による第1回目と第2回目との各設問別の正解率を比較し、第1回目の正解率に対し、第2回目の正解率が一体どのように変化したか、上昇、下降の比率を、各学校別、一般受講者別に対比したものを一括して以下に示す。

(ホ) A票の学習効果の上昇・下降の比率とB票との対比

— 学習到達度の相互間の比較 —

△印は下降

			A票第1回目 正解率	A票第2回目 正解率	上昇比率	B票正解率
○学校別	看護学校	平均	79.5%	90.6%	11.1%	74.0%
	女子短大	平均	61.2	66.8	5.6	54.0
	工業短大	平均	64.5	64.0	△ 0.5	47.6
	一般受講者	平均	73.0	83.7	10.7	74.1
○設問別						
問1	看護学校		65.8	89.2	23.4	43.2
	女子短大		62.0	93.6	31.6	46.8
	工業短大		69.8	85.7	15.9	54.8
	一般受講者		72.6	87.3	14.7	61.8
問2	看護学校		68.4	78.4	10.0	62.2
	女子短大		40.0	57.4	17.4	42.6
	工業短大		44.2	50.0	5.8	50.0
	一般受講者		43.1	82.7	39.6	70.9
問3	看護学校		68.4	100.0	31.6	27.0
	女子短大		64.0	68.1	4.1	14.9
	工業短大		72.1	66.7	△ 5.4	21.4
	一般受講者		67.8	93.6	25.8	49.1
問4	看護学校		94.7	97.3	2.6	48.6
	女子短大		72.0	72.3	0.3	48.9
	工業短大		88.4	71.4	△ 17.0	47.6
	一般受講者		85.6	89.1	35.0	70.9
問5	看護学校		81.6	89.2	7.6	78.4
	女子短大		80.0	72.3	△ 7.7	48.9
	工業短大		83.7	73.8	△ 9.9	31.0
	一般受講者		79.5	86.4	6.9	63.6
問6	看護学校		39.5	86.5	47.0	83.8
	女子短大		46.0	48.9	2.9	27.7
	工業短大		48.8	45.2	△ 3.6	35.7
	一般受講者		62.3	72.7	10.4	83.6

		A票第1回目 正解率 %	A票第2回目 正解率 %	上昇比率 %	B票正解率 %
問7	看護学校	89.5	89.2	△ 0.3	94.6
	女子短大	74.0	74.5	0.5	68.1
	工業短大	65.1	61.9	△ 3.2	57.1
	一般受講者	69.9	77.3	7.4	85.5
問8	看護学校	97.4	100.0	2.6	94.6
	女子短大	84.0	91.5	7.5	85.1
	工業短大	86.0	73.8	△ 12.2	57.1
	一般受講者	97.2	95.5	△ 1.7	80.9
問9	看護学校	97.4	100.0	2.6	73.0
	女子短大	58.0	74.5	16.5	63.8
	工業短大	69.8	83.3	13.5	40.5
	一般受講者	91.1	96.4	5.3	60.9
問10	看護学校	71.1	91.9	20.8	89.2
	女子短大	64.0	61.7	△ 2.3	74.5
	工業短大	48.8	69.0	20.2	40.5
	一般受講者	51.4	70.0	18.6	92.7
問11	看護学校	68.4	78.4	10.0	83.8
	女子短大	32.0	36.2	4.2	55.3
	工業短大	32.6	31.0	△ 1.6	47.6
	一般受講者	45.9	56.4	10.5	72.7
問12	看護学校	100.0	100.0	0	62.2
	女子短大	88.0	85.1	△ 2.9	38.3
	工業短大	95.3	81.0	△ 14.3	21.0
	一般受講者	95.2	97.3	2.1	62.7
問13	看護学校	100.0	97.3	△ 2.7	100.0
	女子短大	54.0	53.2	△ 0.8	80.9
	工業短大	51.2	52.4	1.2	78.6
	一般受講者	67.8	83.6	15.8	96.4

	A票第1回目 正解率	A票第2回目 正解率	上昇比率	B票正解率
問14 看護学校	94.7%	94.6%	△ 0.1%	86.5%
女子短大	62.0	61.7	△ 0.3	80.9
工業短大	74.4	69.0	△ 5.4	71.4
一般受講者	92.5	93.6	1.1	92.7
問15 看護学校	55.3	67.6	12.3	83.8
女子短大	38.0	51.1	13.1	34.0
工業短大	37.2	45.2	8.0	50.0
一般受講者	73.3	73.6	0.3	67.3

各設問別によって、上昇比率や下降比率にバラツキがでている。特に「工業短大」では、第1回目より第2回目において下降を示している問題がかなり見受けられる。理科系の学校で社会科的なものが苦手であるといった学生が多いこと、さらに、学校においても社会科学関連の授業科目が少ないことにも一因があるのかも知れない。この点で、一般受講者は安定した学習効果をあげているといえそうである。

最後に、A票によって、「一般受講者」が、社会学関係の学者名をどの程度認知しているかを受講前後について調べた。

全部で18名あげたのであるが、そのうち何名位を知っているかについてみると次のとおりであった。

○認知人員数

	第1回目	第2回目
18人(全部)	2人 1.4%	3人 2.7%
17人		2 1.8
16人		6 5.5
15人		5 4.5
14人		6 5.5
13人	1 0.7	9 8.2
12人	3 2.1	4 3.6
11人	2 1.4	3 2.7
10人	4 2.7	5 4.5
9人	2 1.4	10 9.1
8人	5 3.4	18 16.4
7人	6 4.1	9 8.2
6人	16 11.0	10 9.1
5人	13 8.9	7 6.4
4人	16 11.0	3 2.7
3人	13 8.9	4 3.6
2人	26 17.8	1 0.9
1人	28 19.2	2 1.8
0人	9 6.2	3 2.7
計 146人 平均4.05人		計 110人 平均9.2人

平均4.05人しか知らなかった者が、9.2人の認知度に上昇している。すなわち、かなり学習理解が深まり、広がったことがみられる。

では、個々の人名についてみればどのようなになっているか。これを示したのが次の表である。

○人物名の認知度の推移

人 名	第 1 回 目			第 2 回 目			1回目に対する 2回目の増加率
	順 位	認知者数	認 知 率	順 位	認知者数	認 知 率	
高 田 保 馬	7	20 ^人	13.7%	10	45 ^人	40.9%	2.99 ^倍
A. コ ン ト	5	39	26.7	1	97	88.2	3.30
R. マッキーパー	8	16	11.0	15	34	30.9	2.81
G. ジ ン メ ル	11	13	8.9	4	81	73.6	8.27
G. タ ル ド	15	6	4.1	7	69	62.7	15.30
E. デュルケイム	13	10	6.8	16	33	30.0	4.41
F. テンニース	13	10	6.8	17	24	21.8	3.21
T. パーソンズ	8	16	11.0	14	38	34.5	3.14
戸 田 貞 三	12	12	8.2	11	44	40.0	4.88
M. ギンスバーグ	17	5	3.4	11	44	40.0	11.76
新 明 正 道	10	15	10.3	8	57	51.8	5.03
G. ギュルヴィッチ	18	4	2.7	13	41	37.3	13.82
H. スペンサー	4	41	28.1	2	94	85.5	3.04
S. サン, シモン	6	29	19.9	9	48	43.6	2.19
K. マ ル ク ス	1	102	69.9	3	87	79.1	1.13
V. ヴ ィ ー ゼ	15	6	4.1	17	24	21.8	5.32
M. ウ ェ ー バ ー	3	46	31.5	6	71	64.5	2.05
清 水 幾 太 郎	2	62	42.5	5	80	72.7	1.71
受 験 者 数	146 人		㉠	110 人		㉡	$\frac{B}{A}$

学習内容でとりあげたG. タルド, G. ギュルヴィッチ, M. ギンスバーグやG. ジンメルなどの社会学者を初めて認知したことを如実に示している。

社会学者名の認知度の結果については、学生の場合も、大体これに準ずる傾向を示していた。

(4) 包括的な所見

(イ) 学習効果は、一般受講者の場合には、明らかに一定の向上率の上昇という形で、安定したものがみられる。

これに対し、学生の場合は、学校間のバラツキがみられ、ある学校では、正解率や得点のバラツキが学習効果として縮まり、理解レベルの均等的上昇化が認められ、別の学校では、正解率や得点のバラツキがかえって広がり、正解率平均が下降するという奇妙な現象も出現している。

- (ロ) 今回の試みにおいては、学生へのテレビ教材の活用は、抽象的、理論的内容面では効果が少なく、むしろ、家族や地域社会や職場社会の具体的事例説明の場合に大いに役立ったと考えている。
- (ハ) 事例説明の場合は、まずテレビで事例紹介をして、その後普通授業を行って、確認の締をするという方法がよく、理論的なものは、まず講義を先に行って、後にテレビ教材をみせるといった形が3校とも共通してよかったようである。
- (ニ) テレビ教材を教室で使用する場合、始めから終りまで全部みせる必要はない。予備知識を与えておいて、後で見せることや、逆に、先にテレビを見せて、後で補完的に授業するなど、活用の仕方に選択上の工夫がなければ、学習意欲も態度も低調になってしまうと考える。
- (ホ) テレビ教材の活用をするに当たっては、各教室の設備の問題、聴講学生の人数の問題、授業時間の長短の問題など、さまざまな条件を考慮する必要があるようである。
- (ヘ) テレビ活用は、授業能率を向上させること、魅力ある新鮮な教材を豊かに提供しうることなど、具象化して事実そのものをダイナミックに示すテレビのプラス面を大いに活用する可能性は大学教育の技術改革の一つでもあるといえよう。

最後に、学習効果のためのテストに用いたA票、B票を附録としてつけておく。

〔 附 録 〕 テ ス ト 問 題

受講証番号

A 票

次の設問（問1～問15）について、それぞれ正しいと思うものを一つ選び、その番号を○で囲んでください。

問1. 今日では社会学という学問は

1. 社会の歴史、地理、政治、経済等の全体を総合的に取上げて研究しようとする学問である。
2. 社会集団や人間関係を主要な研究対象とする学問である。
3. 中学校、高校の社会科をもっと理論体系的に研究していこうとする学問である。

問2. 社会学という学問の成立の起源やその時期は

1. それは原始、古代の昔からあった学問である。
2. それは大体20世紀に入ってから成立した学問である。
3. それは大体19世紀前半期に成立した学問である。

問3. 社会形態を共同社会型と利益社会型とに二大別してみたとき、これらについての特色は

1. 共同社会は古く、利益社会は新しいといえる。
2. 共同社会は新しく、利益社会は古いといえる。
3. 両者はともに古い時代の社会形態であるといえる。

問4. 家族は時代とともに変化してきているが、このことは端的に

1. 核家族化の動向に示されている。
2. 都市化現象に示されている。
3. 進学率の上昇に示されている。

問5. 離婚現象が増加傾向にあるが、この傾向は

1. 女性の自活能力や社会的地位が向上してきたからである。
2. 家族制度が解体したからである。
3. 男女共学の結果である。

問6. 「恋愛は輝かしい誤解であり、結婚は惨澹たる理解である」という言葉があるが、現代社会では

1. 全くそのとおりの傾向が多分にみられる。
2. 全くそのような傾向はみられない。
3. 過去はそうであった。

問7. 核家族の構成形態は

1. アトトリの子供が結婚後も親と同居して、家族生活をともにしている形態をいう。
2. アトトリの子供が結婚後は親と別居して、別の家を創設して暮らす夫婦・未婚の子女の家

族構成の形態をいう。

3. 夫婦2人だけで暮らす少人数家族の形態をいう。

問8. 地域社会を農村と都市とに大別して、両者の地域社会の対照的特徴を一般的に見てみると

1. 農村は都市に比べ、地域的移動性の大きい地域社会である。
2. 農村は地縁と血縁の人間関係が濃密である。
3. 農村は日常生活の場において、外部からの刺激と情報量が都市よりも常に大きい。

問9. 農村と都市との社会的性格を対比してみると

1. 都市は地域社会としての個性や団結が強い。
2. 都市の住民構成は農村に比し、多様性をもつ。
3. 都市は第1次産業の比重が大きい。

問10. 農村と都市との関係について、大まかにその時代的推移をみると

1. 昔は、農村の方が人口数も多く、生活の中心で、有力な地位を占めていた。
2. 都市の方が、昔から人口数も多く、生活の中心で、有力な地位を占めている。
3. 農村と都市との往来・交流は昔は非常に盛んであった。

問11. 仕事場と住居との分離が、職住分化となって時代と共に進展してきているが、この動向の根本的理由としては

1. 産業構造において、第一次産業の比重が、時代とともに減ったからである。
2. 逆に、第一次産業の比重が、時代とともに増えたからである。
3. 交通の便が良くなったからである。

問12. 職場は色々なものがあり、それぞれが独自の特徴を有している。職場組織の規模の大小と結びつけて、二、三の特徴をみてみると

1. 小規模の職場は、人間関係が家族主義的であり、温かいものがみられる。
2. 小規模の職場は、一般に労働賃金が高い。
3. 大規模の職場は、労働賃金も良く、人間関係も温かで、高能率の家族主義的ムードが職場の中に支配している。

問13. 現代社会と過去の社会一般とを相対的に比較してみると

1. 現代社会は一般に封鎖性が強い。
2. 逆に現代社会は一般に開放性が大きい。
3. 現代社会には個性と伝統性が多く残存している。

問14. 現代社会の各種の集団組織を過去に比べてみると

1. 地縁・血縁の集団の果す比重が高まりつつある。
2. 機能集団、目的団体等の機能的分化が著しい。
3. 集団組織の小規模化が進行している。

問15. 現代社会と人間行動の対応関係について

1. 現代社会は異質性社会であるゆえ、各個人の個性と自由行動が一段と発達する。
2. 現代社会は異質性社会であるゆえ、社会全体としての組織的統一性や統制力が非常に強い。
3. 現代社会は異質性社会であるゆえ、一人の人間が同時に数多くの集団へ加入参加をして生活をしない。

問16. 次の社会学者達の名前を今までに聞いたことがありますか。或は、書物等を通じて知っていますか。見たり、聞いたり、教えられたりして、知っている人々があれば、その人々の全てに○印をしてください。

1. 高田保馬 2. A. コント 3. R. マッキーバー 4. G. ジンメル
5. G. タルド 6. E. デュルケイム 7. F. テンニース 8. T. パーソンズ
9. 戸田貞三 10. M. ギンスバーグ 11. 新明正道 12. G. ギュルヴッチ
13. H. スペンサー 14. S. サン, シモン 15. K. マルクス 16. V. ヴィーゼ
17. M. ウェーバー 18. 清水幾太郎

御協力ありがとうございました。

受講証番号

--

B 票

次の設問（問1～問15）について、それぞれ正しいと思うものを一つ選び、その番号を○で囲んでください。

問1. 特殊科学的社会学は

1. H. Spencer の主張したものである。
2. 「純社会的なもの」に研究対象をしぼらんとする立場の社会学である。
3. 初期の社会学の立場である。

問2. 有機体論的综合社会学は

1. G. Simmel の主張したものである。
2. 1880年以後になって主張された社会学の一つの立場である。
3. A. Comte の社会学, H. Spencer の社会学などはその典型である。

問3. 新しい総合的傾向の社会学は

1. 形式社会学の立場の中に認められる。
2. G. Tarde や Von. Wiese などの社会学の立場の中に認められる。
3. M. Ginsberg や G. Gurvitch の社会学の立場の中に認められる。

問4. 社会学の学問的立場の時代的推移の流れを大まかにみれば

1. 有機体論的综合社会学→新しい総合的傾向の社会学→特殊科学的社会学
2. 特殊科学的社会学→有機体論的综合社会学→新しい総合的傾向の社会学
3. 有機体論的综合社会学→特殊科学的社会学→新しい総合的傾向の社会学

問5. 家族集団の機能は基礎的機能と派生的機能とに大別されるが

1. 基礎的機能は時代と共に大いに変化してきている。
2. 派生的機能はあまり変化していない。
3. 家族機能の縮小化は派生的機能面において著しい。

問6. 今日の家族は昔の家族に対比してみれば一般的傾向としては

1. 夫婦関係よりも親子関係の方が重視されている。
2. 親子関係よりも夫婦関係の方が重視されている。
3. 超世代的連続性が重視されている。

問7. 老親の扶養や世話を十分に、直接的に子供がやらなくなる傾向が最近ふえ、問題とされるようになってきたが、その大きな要因の一つは

1. 人間関係が冷たくなってきたからである。
2. 親子同居の生活形態の存続が事実上、困難になってきたからである。

3. 親のエゴ, 子供のエゴが拡大されたからである。

問8. 農村社会の根強い地域共同体的性格は

1. 伝統性が強いからである。
2. 住民の土着, 定住性と地域的封鎖性が強かったからである。
3. 都市社会と対抗する必要があったからである。

問9. 都市社会は開放性, 広大性を特色とする地域社会であるから

1. 各人の自由, 個性などが日常生活の場において常に制約され易い。
2. 都市では, 人やものの理解, 把握の仕方が, 具体的, 個別性をもつ。
3. 都市では, 人やものの理解, 把握の仕方が, 抽象的, 普遍性をもつ。

問10. コミュニティー活動のねらいは主として,

1. 昔の如く各地区毎に, 強い地域共同体的連帯性を復活することに求められている。
2. 地方行政推進のための一つの目的, 手段として考えられる。
3. 地域住民達の自主性に基づいて, 新しい地域社会の再生と創造・活性化などをねらいとしている。

問11. 職場社会をA. 家族自営型, B. 近接型, C. 分離型の3類型に分けてみると

1. Aは, 後継者難の問題に直面していない。
2. Cは, 内部組織の専門的, 機能的分化が多である。
3. Bは, 近代化されている大企業体の中に多く認められる。

問12. 職場社会における人間関係の特徴をみれば, 大まかにいって

1. 分離型職場ではフォーマルな人間関係とインフォーマルな人間関係の分離と区別が重要な意味をもつ。
2. 近接型職場ではフォーマルとインフォーマルな人間関係の二つの分離と区別が明確に認められる。
3. 家族自営型職場ではフォーマルな人間関係のみが認められる。

問13. 現代社会は昔の社会一般にくらべてみると

1. 日常生活の場において地縁や血縁の人間関係の果している比重が高い。
2. 日常生活の場において地縁や血縁の人間関係の果している比重が低い。
3. 自家の近くに昔なじみや親族や知友人を多くもっている。

問14. 現代の社会的性格は

1. 個性・伝統性が強い。
2. 個性・変動性が大きい。
3. 個性・異質性が少ない。

問15. 現代人の行動形態の特色は, リースマンによれば

1. 伝統志向型である。
2. 内部志向型である。
3. 他人志向型である。

今後の参考とするために次の諸点について、評価をしてください。

1. この講座を受講されて、あなたのために、何かプラスになりましたか。

(最高5点, 最低1点, 5段階評価)

点

2. この講座を聴講されて、あなたの感じられた難易度について評価してください。

(最も難しい5点, 最も易しい1点, 5段階評価)

点

3. この講座を聴講されて、とくに、あなたにとって印象に残った事柄があれば自由に書いてください。

1.

2.

3.

4. 今後の社会科学系の講座内容や放送について御希望があれば書いてください。

1.

2.

3.

御協力ありがとうございました。